

『とはずがたり』巻二に描かれた

「色好み女房」二条とその意義

邱 春 泉

一 はじめに

『とはずがたり』の前篇(巻一、二、三)と後篇(巻四、五)は、それぞれ作者後深草院二条が宮廷に仕えていた時代の生活と出家した後の生活を語っている。

前篇と後篇のそれぞれの主題については、主に、前篇は二条が宮廷生活の愛欲と罪に苦しんでいた時代で、後篇の修行生活はそれに対する超克ないし懺悔であるという捉え方と(注1)、前篇は二条が後深草院の自分に対する扱い方に傷ついた時代で、後篇は修行や再会などを通じて、院との愛を確認できた時代であるという捉え方(注2)と、大きくは二種類に分けられる。主題に対する把握に合わせて、前篇に描かれた二条の宮廷生活について、華麗な宮廷生活である反面、院に寵愛されながらも、与えられた待遇に不満を持ち、傷つけられ続けた孤独で不安な生活といった性格が論じられてきた。強調する側面は異なるが、二条が院の寵姫、後宮の人気者としての生活を送る一方、苦悩や傷心を抱いていたという様相が先行研究によって明らかにされている。

かといつて、二条の宮廷時代は、前篇全体で一貫してそうした

相克する様相を呈しているわけではない。巻二は、二条が様々な宮廷行事において活躍していた記事が集中していて、前後の巻に比べてとりわけ明るくて華やかな雰囲気が漂っていることが異色である。この現象に対して、巻二は作者の「もつとも時めいた時代」(注3)、「得意の絶頂」である(注4)などの意見も出されている。しかし、巻二における華やかな宮廷生活を二条の順調な一時期と単純に理解してよいのだろうか。本稿では、以下、従来とはやや異なる視点から、巻二の特異性に焦点を当て、そこに描かれた宮廷生活の内実、ひいては『とはずがたり』という作品の特質を考える。

二 華やかな宮廷行事

『とはずがたり』巻二の顕著な特徴は、宮廷行事が多く記されていることである。建治元年(一二七五年)春から建治三年(一二七七年)秋までのほぼ三年の記事の中に、十回の宮廷行事の記録がある。それに対して、巻一には後深草院の嵯峨殿御幸だけが描かれていて、巻三に大宮院の病を見舞うための後深草、龜山両院

の大井殿御幸と北山准后九十賀の二つの行事が記されている。二条が御深草院御所に仕えていた時代のことに限定すれば、巻一と巻三合わせて八年間分の記事にそれぞれ一回の宮廷行事だけがある。

巻一の嵯峨殿御幸は巻末の近くに記されている。大宮院が嵯峨殿で前斎宮を招待するために後深草院をも招いたのに応じて、後深草院は二条一人を連れて嵯峨殿に赴き、三日間滞在した。一連の記事では、二条は酒宴などの晴れの場面にほとんど登場しておらず、御深草院が東二条院の抗議に対して二条を弁護する場面や、二条が前斎宮の闕まで後深草院を手引きする場面などの私的な場面に登場していただけである。巻三の両院大井殿御幸の際も、二日間にはわたって行われていた遊宴の場では二条の姿がほとんど描かれず、ただ両院一所の寝所に仕えた場面に登場しているのみである。これらの記事においては、二条に纏わる複雑な人間関係が描写の重点であり、豪華な行事は背景でしかない。二条の行事そのものに寄せた関心や興味なども見られない。

それに対して、巻二に描かれた宮廷行事においては、二条の活躍が目立つ。二条が中心的な人物として活躍した宮廷行事の記事は以下の通りである。

①建治元年（一二七五年）正月に、廷臣たちが粥杖で女房たちを打つことがあった。報復として、二条が東の御方と申し合わせて院を打った。それに対して、院が訴訟を起こし、公卿評議で二条の罪を問う遊びを行った。

②上記事件の結果として、二条の縁者が次々と豪華な品物を贈り、酒宴を開き、二条のために贖いを行った。

③三月に龜山院が後深草院の御所に蹴鞠のために御幸した。二条は龜山院に柿浸しを差し上げる接待役に指名された。

④四月、長講堂御移徙の際に、二条は五両の車の一の車に乗り、叔母の京極殿よりも豪華な衣装を身に着けて、格の高い席次を占めた。

⑤公卿、殿上人、上臈・小上臈の女房が参加する壺合では、二条も壺を頂いた。叔父善勝寺大納言は他人が作った趣向を凝らした反橋を盗んできて、二条の壺に飾った。

⑥建治三年（一二七七年）二月、小弓の負けわざとして後深草院は女房たちを蹴鞠姿に仕立てて、龜山院の御覧に供する。二条は男装女房の首席として鞠を袖に受けて龜山院に捧げる役を務めた。

⑦三月に『源氏物語』を真似た女楽において、二条が明石の上の役にあてられた。「御鞠の折に違ふべからず」という院の指示によつて、二条の席次が女三の宮に扮する今参りの上に定められた。

残り三つの行事の記事は、建治元年（一二七五年）九月と建治二年（一二七六年）春の六条殿の供花と伏見の松茸狩り、花合などで、記事が簡略に記されているため、二条の活躍は特に確認できない。巻二巻末に記されている今様伝授のための後深草院の伏見殿御幸だけは、二条は巻一と巻三と同じように、晴れの場面ではなく、近衛の大殿に犯された場面に登場している。

以上のように、巻二に記された十回の宮廷行事の中で、七回が二条が晴れの場で活躍しており、それぞれの場面の中心的な人物であった。

『とはずがたり』において、後深草院後宮における地位は常に二条の執着するところであるが、前掲の宮廷行事の中で、二条の位置づけはどうであろう。

①の粥杖事件では、二条は自分と東の御方が共謀して院を打ったことを明記している。しかし評議の時、二条の抗議が無視され、自分一人が罪を問われた。東宮の母である東の御方がこうした遊戲の場で話題にされるのは似つかわしくないため、二条だけが俎板にのせられたと考えられる。

④の長講堂供養の際には、二条が「七つ衣」を着たのに対して、叔母の京極殿は「五つ衣」を着ていたことが特筆される。これは席次のことと併せて、二条が京極殿より重く扱われていたことを表している。しかし、岩佐美代子氏の指摘によると、「三つ衣」の着用は女院に準じる待遇、最高の誇りであるのに対して、「七つ衣」、「五つ衣」はただ女房の公式の重ねの数であった（注5）。卷一において、二条が院に伴って嵯峨殿に赴く際、「三つ衣」を着て、「女院の御同車」と誤解されたことがある。その時の榮譽に比べて、ここはただ豪華な女房衣装を身に纏ったにすぎない。

⑥の小弓の負けわざにおいて、二条は「八人の上首」であった。これは二条が二十四人の男装女房の中で一番上位であったことを意味している。ただし同時に、二条より身分が高い東の御方、西の御方などが男装の見せ物の列に入れられなかったことをも物語っている。二条と彼女たちが受けた待遇の差が窺える。

⑦の女楽事件の時も、明石の上に扮した自分が、女三の宮に扮する「今参り」より高い席を占める理由を説明するために、「御鞆の折に違ふべからず」という院の言葉をわざわざ記している。「御鞆の折」の秩序というのは、女房クラスの「上首」で、院の後妃

と目された東の御方、西の御方と一線を画している。東の御方たちと同席で女楽を演じる役に選ばれたが、二条は彼女たちと峻別されている。

挙げられた七つの宮廷行事の性格を考えれば、④を除けば、すべて戯れとも言える宮廷貴紳たちの遊戲である。これらの宮廷行事において、二条は筆頭女房として扱われている。人に誇示できる花形女房として院に寵愛されているが、后妃格の扱い方ではない点は強調しておきたい。度々、院の正妻、東宮の母を自分と同格のように描いていた二条は、院の正妻、国母の地位に強く憧れていた。彼女の望みは時めく女房程度のはずではない。しかし卷二において、女楽で祖父の横行に侮辱を感じて御所を出奔するまでに、二条の自分が置かれた立場に対する不満は見られない。そればかりか、次のような心内語が度々現れる。

をかしくも堪へがたかりしこともなり。（行事②、二九二頁）
善勝寺の大納言、夜の間に（反橋を）盗みわたして、わが御壺に置かれたりしこそ、いとをかしかりしか。

（行事⑤、二九七頁）
中の御所の弘所を屏風にて隔て分けて、二十四人出で立つさま、思ひ思ひにをかし。

（行事⑥、三二六頁）
袖に受けて御前に置くことは、その日の八人上首に付きて勤めはべき。いと晴れがましかりしこともなり。

（行事⑥、三二六頁）

二条が自分の様々な宮廷の戯れにおける活躍に対して、「をかしく、晴れがまし」と感じ、楽しんで、誇らしく思っていたこと

が示されている。花形女房という、后妃と一線を画した扱いであるが、巻二において、二条はそういう立場に甘んじて、宮廷社交の場で快活に振舞い、華やかな宮廷の戯れに夢中になっていたのである。

三 男性貴人との交際

宮廷行事と平行して、宮廷を背景として、二条の男性貴人達との交際も多く記されている。巻二では、二条は有明の月をはじめ、雪の曙、龜山院などの貴顕と付き合っていた。二条の男性関係は前篇を通じて複雑な様相を呈しているが、中でも巻二に記された情事には独自な特徴が見られる。

巻一では、二条が後深草院の寵愛を受けた後、雪の曙とも愛人関係になり、二人の間で深く苦しんでいた。巻三では、院が二条を他の男性に与え、二条がそうした扱いにつらい思いをしていた。こうした暗くて重苦しい状況は、巻二では、巻末の近衛の大殿に犯された事件を除けば、ほとんど見られない。

巻二において、院に強いられた近衛の大殿との関係は別として、ほかの男性との関係は、いずれも二条が自らの意思で行ったことである。前記行事③の際に二条が龜山院の目に留まり、二人は歌の贈答を始めた。その間、多忙で雪の曙との逢瀬が叶わないが、恋文でお互いの思いを訴え続け、さらに有明の月の求愛を受け入れ、人目を盗んで密会を重ねた。巻二は二条の男性関係において最も自由で華やかな時期である。特に二条と有明の月の交渉において、次の二場面が注目される。

①建治元年（一二七五年）三月、二条が不意に有明の月に告白され、その場で断った。すぐ後に、二条が有明の月をもてなす酒宴に出て、陪膳を勤めた。院と有明の月が同席の場で、二条が告白されたことを浮かべて、「心の中を人や知らむと、いとをかし」と心の中で一人笑いをしていた。

②建治二年（一二七六年）秋、叔父善勝寺大納言が有明の月のために二条を出雲路まで呼び出し、二条が不本意ながら有明の月と一夜を過ごした。その夜、二条は堅く有明の月を拒み通したが、自分が寢床の中で座り込んでいた様子を、「つゆの御答へも申されで、床中に起き居たる有様は、『あとより恋の』と言ひたるさまやしたるらむと、我ながらをかしくもありぬべし」と心中で面白がついていた。

二つとも二条が有明の月を拒否する場面である。相手の求愛を拒否しながらも、その事態を「をかし」と思い、上機嫌であった。特に②の場合、院は弟が二条に手を出そうとしたことも知らず、二条を弟のもてなしに呼び出し、有明の月は兄の寵姫に告白して失敗し、心の鬼を抑えて二人の前で平常な顔を装っていた。院と有明の月の心中を知り尽くして、二人を側で眺め、「をかし」と思っていた二条は、まさに自分が引き起こした三角関係の面白さを味わっていた。このような二条の態度には、男性扱いに上手な女性性が相手をじらして楽しむ趣がある。ほかに二条は、有明の月から送ってきた趣向を凝らした恋文に興味を持ち、進んで彼の接待役を勤めたこともあり、初めて有明の月に犯された後には、度重ねて自分から密会に赴いたこともある。有明の月との関係は男の僧という特殊な身分と、凄まじい執念から、深刻なものとして捉えられがちであるが、女楽事件で御所を出奔するまでに、二条が

有明の月との交渉に恋愛遊戯の楽しさを感じていたことが、上の記述から読み取れる。

院の寵愛も含めて、二条はこの時期に四人の男性と矛盾無く交渉していた。このような気楽さは、巻一と巻三に見られない現象である。たとえば巻一において、雪の曙と交渉する際に次のような心内語が度々見られる。

心のほかの新枕は、御夢にや見ゆらむと、いと恐ろし。

(二三八頁)

このほどは御訪れのなきも、わが過ちの、空に知られぬにやと案ぜらるるをりふし、(後略)

(二四四頁)

せめての罪の報いも思ひ知られて、心の内の物思ひ、やる方なけれども、(後略)

(二五四頁)

「恐ろし」、「過ち」、「報い」などの罪意識を表す表現から、雪の曙と交渉する間、二条が常に自分の院に対する不実を強く意識していて、報いの恐怖に苛まれていたことが分かる。それに対して、巻二においては、男性との関わりが多く描かれているにもかかわらず、院への気兼ねがほとんど見られない。情事に関する心内語から、巻一の段階で二条が雪の曙との関係こそ密通として捉えていたが、巻二になると、男性たちとの情事を深刻な事情として捉えていない。巻二において、二条はいつも余裕のある態度で男性たちを扱って、宮廷貴紳たちとの風流事を楽しんでいたのである。こういう情事の様相は宮廷行事の描写と合わせて、巻二の明るくて華やかな雰囲気を作り出している。

女楽事件で二条が御所を出奔するまでに、巻二には宮廷行事と

情事の描写が交互に配置されている。二条がときめく女房として宮廷社交の場で活躍しているのと同時に、華やかな男性関係を展開する。巻二に現れた二条の二つの特徴の接点を考えると、宮廷女房の一つの典型を想起させる。自分の才色を発揮して、宮廷を舞台に活躍し、廷臣や貴公子達との曖昧な交際を楽しむ宮廷女房たちは、様々な作品や伝承の中でその姿が見られる。彼女たちはまさに巻二に描かれた二条の二つの特徴を具有している。このような宮廷女房の系列の中で巻二の華やかな宮廷生活を捉え直せば、そうした特殊な時期が出現する原因と意義を見出せると思われるのである。

四 「色好み女房」

上述の宮廷女房の典型を求めると、平安から鎌倉時代までの文学作品に描かれた「色好み」と称される女性の一群が目につく。その濫觴は『伊勢物語』で、六つの章段の中で「色好み」の女性が登場している。いずれも短い章段で、男女のお互いに対する気持や和歌贈答などが記されている。この『伊勢物語』における「色好み」の女性については、すでに多くの指摘がなされている。

今関敏子氏は「色好み」ということはまず、「美しいものを、あるいは優れたものを選択する」ということであると把握した上で、「色好み」の女はその魅力ゆえに様々な男をひきつけるが、主体的に、優れた男を選ぶ存在である」と論じている(注6)。恋における主体性とあわせて、「色好み」の女性の「才媛であるという天与の資質」、「才能があり、歌による風雅な举措が男性をひきつけてやまないものがあつたという面」も指摘されている(注7)。

「色好み」の女性が、男性を引き付ける力と、男性と駆け引きする術を有する一方、浮気、不誠実、思慮が浅いなど欠点もあると指摘しているのは山本登朗氏である（注8）。また、木下美佳氏は山本氏が提起した「魅力ある悪女」の観点を受け継いで、『伊勢物語』における「色好み」の女性が昔男を翻弄する存在であることを示した（注9）。

「色好み」の女性の誘惑性、男性の関心を引く力は、研究者達が共通して注目する点である。それに対して、藤井貞和氏は『伊勢物語』二十八段の歌「などてかくあふごかたみになりにつむ水もらさじとむすびしものを」にある「水もらさじ」と、三十七段の返歌「ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまで解かじとぞ思ふ」にある、紐を一人では解かぬという表現は遊女の契約に似ていると指摘し、さらに女房集団、宮廷社会にうごめく後宮女性たちの集団的存在は娼婦集団に性格的に似たものであると示唆している（注10）。『伊勢物語』の六つの章段に登場する「色好み」の女性達は、生い立ちや身分などが一切語られないで、「色好み」だけが標識になっている特徴がある。氏の論説の方向で考えると、『伊勢物語』の中で、「色好み」という肩書きを持つ女性たちが、男性の興味的対象である女房集団を想定しての設定であるという可能性もある。

『伊勢物語』の記述は簡潔で、抽象的であるゆえに、「色好み」の女性の具体的なイメージを掴みにくい、ほかの作品に登場する「色好み」の女性をも視野に納めれば、「色好み」の女性の性格が明瞭になる。管見の限り、鎌倉時代までに、女性が「色好み」とされる例はほかに七つの作品にも見られる。以下、女性の身分及び人々の評価を中心に、それぞれの作品に描かれた「色好み」

の女性のエピソードを紹介しておく。

『宇津保物語』忠こそ巻と蔵開・中巻に登場した梅壺の女御は、「いみじかりし色好みなりし」と紹介されている。彼女は忠こそとの噂があつて、後に藤原兼雅の妻の一人となった。

『源氏物語』末摘花巻に登場していた大輔命婦は「いといたう色好める若人」で、男性の心理をよく把握し、末摘花を指導して、源氏の興味を引くことに成功した。源氏にとって、彼女は「御梳櫛などには、懸想だつ筋なく、心やすきものの、さすがにのたまひたはぶれなどして、使ひならしたまへ」る使い人として都合良い存在である。一方、大輔命婦は源氏に「色めいたり」と思われ、彼女の行為に対して、語り手は「あだめきたるはやり心」と批判的な評価を示している。

『栄花物語』さまざまなるこび巻に記された「対の御方」藤原国章女は、藤原兼家の娘を儲けていると同時に、兼家の息子道隆の娘をも一人生んでいる。「いと色めかしう、世のたはれ人と言ひ思はれたまへるに、この内侍の殿の御ゆかりに、ただ今はいみじうおぼえめでたければ、世の人、『さは、かうもありぬべきことにこそありけれ』と言ひ思ひたり」、「大式なりける人の、女をいみじうかしづき、めでたうてあらせけるほどに、あまりすぎずきしうなりて、色好みになりけるとなむ」というふうで紹介されている。

この女性はまだ『蜻蛉日記』において「近江女」として登場している。道綱母の侍女は「失せたまひぬる小野宮の大臣の御召人どもあり。これらをぞ思ひかくらむ。近江ぞ、あやしきことなどありて、色めく者なれば」と彼女を評している。兼家の叔父実頼、兼家、兼家の子道隆三人と関係を持つ藤原国章女に対する当時の

風評であろう。兼家との間に生んだ娘が東宮の尚侍になったほど、兼家から寵愛が深いにもかかわらず、人々に軽蔑されている。特に父の思い上がりで、彼女が分を超えるほど傳かれたことが、彼女の色好みになる原因とされることから、出自に余るほどの才色を備える女性は「色好み」になりがちだという論理が読み取れる。

『古本説話集』第八話において、皇太后妍子の女房、御荒の宣旨は中納言定頼との恋に落ち、定頼が離れた後も彼を恋しく思っていたが、後に両親の計らいで他の男と結婚させられた。「本院の侍従」とともに「世にいみじき色好みは本院の侍従、御荒の宣旨と申たる。侍従ははるか昔の平仲が世の人。この御荒の宣旨は中比の人。されば、昔今の人を、一手に具して申したる也」と批判されている。『大鏡』は、妍子のもとで女房勤めをして、夫と子供を捨てたという彼女の経歴を伝えている。

本院の侍従は平中と一対で語られた伝説上の人物で、藤原時平家の女房とも、村上后安子の女房とも言われている。平中を拒みながら彼の好意を逸らさないように引きつけて、平中を恋死に追い込んだ人物である。『古本説話集』は本院の侍従について詳しく語っていないが、『宇治拾遺物語』卷三第十八話は彼女の事績を語って、「世の色好みにてありける」と紹介している。

『古本説話集』第三十九話の中で、花山天皇の女御婉子女王は天皇が出家した後、藤原実資の妻となり、道信中将も彼女を懸想した。そのことが『古本説話集』の編者に「為平の式部卿宮とて、村上の御門のいみじきおぼえにて、もてかしづかれ給し宮の御女の、かかる色好みにならせ給へる御振舞、いといと口惜しく」と批判されている。

以上挙げたのは、ほぼ平安期の作品で、人間関係の模様の中で、

「色好み」の女性を浮き彫りにしている。鎌倉以降の作品は、「色好み」の女性の個人の性質に焦点が当てられ、異なる趣を呈している。

『宇治拾遺物語』卷三の第二話「藤大納言忠家、若いふ女放屁の事」の中で、藤大納言は「美々しく色好みなりける女房」のところへ入って、夜が更けるまで睦言を言っている間、女が高らかな放屁をして、興ざめさせた。

『十訓抄』卷一の第十七話の中で、「太秦なる所に、しかるべき女房の、色好みありと聞きて」、男達が尋ねて行ったが、女が漢詩を口ずさんでいたのを聞いて、「なかなかなることもぞ、いひかけらる。やくなし」と退散した。

以上の二話に登場する「色好み」の女性の詳しい情報は分らないが、「女房」であったことは確認できる。「色好み」の名声が男たちの興味を引いたが、彼女たちは男を閉口させる人物として、滑稽化されて描かれている。二話の滑稽味に対して、最後に挙げた『古今著聞集』の話は、教訓性が色濃くなっている。

『古今著聞集』卷五「小野小町が壮衰の事」は、小野小町が「わかくて色を好みし時」、豪華な生活を送り、「身には蘭麝を薫じ、口には和歌を詠じ、よろづの男をばいやくのみ思ひくだし、女御、后に心をかけたらし」ていたが、両親と兄弟が相次いで世を去った後、文屋康秀の誘いに応じて京を浮かれ出て、零落してしまったという話である。話の末に「人間の有様、これにて知るべし」という教訓が示されている。

小町は、今関敏子氏が指摘した「色好み」女性が傲慢のゆえに落ちぶれる典型である。氏は、選択し、拒むという、女にとってはごく自然なあり方が、男達の愛情を憎しみに転換させ、伝承上で無残な最期に追い込まれたと論じていて、零落は「色好み」女

性につきものであると指摘している（注11）。氏の論述において、零落の結末は女性の傲慢に対する男性の憎しみの表れとして捉えられているが、男に従わないから非難されることは、裏返せば「色好み」の女性が男性を拒否する権利さえない考え方を表している。「色好み」の女性に対する男性の軽蔑としても捉えられる。

『古今著聞集』巻八の「慶澄注記の伯母、好色」によりて死後黄水となること」は、慶澄注記の伯母がいつも男の関心を引くように振舞って、多くの男性を魅了し、命が終わる時もものを取ろうとする様子で手をのばしたまま息を絶えた。死んだ後、骸骨が黄水になったという話である。話末の評語は、「好色」の道、罪深き事なれば、跡までもかくぞありける」と言つて、仏教的な罪の次元まで持ち出し、伯母を批判していた。

上記の作品の内、『古本説話集』までは男女恋愛の有様の表出に重点が置かれているのに対して、『宇治拾遺物語』以降は、滑稽味や宗教的な説教性が色濃くなってきた。この差異は作品の性格の違いに由来しているとひとまずは捉えられる。しかし作品の性格、作者・編者の立場はそれぞれ異なるにもかかわらず、描かれた「色好み」の女性のイメージには、幾つかの共通点が見られる。

一つ目は「色好み」の女性が美貌や才能の持ち主で、男の心を引きつける要領を心得ていることである。これは先行研究の指摘するところと一致している。

二つ目は「色好み」の女性が否定的に語られていることである。この点は説話において鮮明に現れるが、程度の差こそあれ、平安期の物語においても「色好み」の女性に対する作者の批判的な態度が表現されている。

三つ目は「色好み」の女性がほとんど女房クラスの人物である

ということである。『宇津保物語』梅壺の女御と婉子女王は身分の高い女性で、例外であるが、梅壺の女御が天皇の妻から臣下の妻の一人に格下げされた設定は、色好みの故に天皇の妻であり続けられないという作者の理念を反映していると考えられる。婉子女王の方も、その出自の高さ故に、「色好み」の欠点がとりわけ編者に「口惜し」と嘆かせる。「色好み」は彼女のような身分が高い女性にとつて、あつてはならない性格だという編者の主張が分かる。小野小町と慶澄注記の伯母の出自と職業が紹介されていないが、作品の記述から、身分が高くないことが窺える。そのほかの例は全て女房の身分である。この現象は『伊勢物語』中の、年齢、身分、生い立ちなど一切語られていなかった「色好み」の女性達が、女房集団を想定しての設定であるという前述の私見の補強となる。

「色好み」の女性は女房階級の側面を浮き彫りにしているといつてもよからう。

以上、美貌や才能の持ち主で、男の心を引き付ける要領を心得ていて、男性の興味を掻き立てる魅力によつて評判になる「色好み女房」のあり方を明らかにした。前述した『とはずがたり』巻二における二条の性格をかえりみると、宮廷社交の場で時めく女房として誇らかに活躍し、衆目を集め、男性の心を引く存在であったことは、正にこの「色好み女房」の性格と合致している。

「色好み女房」は自分の才色をいかして、多彩な生活を送ることができた反面、軽い存在と目されている。巻二の二条も常に花形女房としてのみ扱われ、后妃格の女性と区別されていた。周りの人に敬意をもつて遇される存在ではなかったと考えられる。

五 「幸ひ人」

うよろこびけり。

(二二番歌詞書)

「色好み女房」と対照的に、宮廷の中心部を占める帝妃、国母クラスの女性にとつて、「色好み」は欠点以外のものではない。二条后高子が醜聞を引き起こし、廃后されたこと(注12)や、承香殿女御元子が源頼定との関係で父顕光に髪を下ろされたことなど(注13)から、高貴な女性に期待されるモラルが窺える。まして女房の身分から上昇し、めでたい人生を迎える女性、いわゆる「幸ひ人」は、むしろ「色好み」性を克服したからこそ、身にあまる幸運に恵まれたと考えられていた。その典型的な例が伊勢である。

歌人伊勢は藤原仲平、時平、平貞文、宇多天皇、敦慶親王など多くの男性と関わりを持っている。宇多天皇の皇子を生んだ身で、天皇が退位出家した後、その子敦慶親王とも子供を為している。「色好み」の経歴を十分持っているにもかかわらず、後の時代に、伊勢像は「色好み」とは反対の方向へ発展していく。

『伊勢集』冒頭の三十余首は、伊勢の一代記風に配置されている。伊勢と関わるさまざまな男性が登場しているが、詞書の中で、「逢はざりけり」など伊勢の拒否の姿勢が強調されている。特に一九番歌と二二番歌の詞書が注目される。

おなじ女、年来、言ふともなく言はずともなき男ありけり。
かへりごともしせざりければ、「年経にけるを、などか「見つ」
とだにのたまはぬ」とはべりければ、この女、「みつ」となむ
名をば付けたるけり。

(一九番歌詞書)

これかれ、とかく言へど、聞かで、宮仕へをのみしけるほど
に、時のみかど、めしつかひ給ひけり。よくぞまめやかなり
けるとおもふに、をとこ宮生まれ給ひぬ。親なども、いみじ

二二番歌の詞書は伊勢が帝寵を受ける場面である。帝の寵愛を受けた伊勢の心情は「よくぞまめやかなりけるとおもふに」と語られている。男達の求愛を相手にしない、宮仕えに専念する「まめやか」な態度が彼女が皇子を孕む幸いに恵まれた原因として捉えられている。

後世の伊勢伝承もこういった伊勢像の延長線にある。『今昔物語集』と『無名草子』は、宇多天皇の出家後、閑寂な生活を送っていた伊勢を伝えている。

然テ、此御息所ハ、極テ物ノ上手ニテ有リケル大和守藤原忠房ト云人ノ娘也。亭子院ノ天皇ノ御時ニ參テ有ケレバ、天皇極ク時メキ思食シテ、御息所ニモ被成タル也。形千心バセヨリ始メ、故有テ可咲ク微妙カリケリ。和歌ヲ讀ム事ハ其時ノ躬恒貫之ニモ不劣リケリ。其レニ、亭子院ノ法師ニ成ラセ給テ、大内山ト云所ニ深ク入テ行ハセ給ケレバ、此御息所モ世中冷ク思ヘテ家ニツクツクト長メ居タル也ケリ。

：(中略)：

伊衡ハ仰セヲ奉テ、御息所ノ家ニ行テ見レバ、五条渡ナル所也。庭ノ木立チ極テ木暗クテ、前栽極ク可咲ク殖タリ。庭ハ苔砂青ミ渡タリ。三月許ノ事ナレバ、前桜謔ク榮ヘ、寝殿ノ南面ニ、帽額ノ簾所々破テ神サビタリ。

『今昔物語集』卷第二十四 延喜御屏風伊勢御息所説和歌語第三十二

まことに、名を得て、いみじく心にくくあらまほしきためしは、伊勢の御息所ばかりの人は、いかでか昔も今もはべらむ。

寛平法皇世をそむかせおはしまして、つれづれにて籠りもたりけむありさま、聞きはべるなどこそ、たぐひなくいみじくおぼゆれ。庭はいと白きものから、苔むらむら生ひて、帽額の簾、ところどころ破れて、神さび心細げなりけるに、延喜の御時、若宮の御袴着御屏風の歌、ただ今詠みてたてまつるべく伊衡中将の御使ひにて、おほせられたりけるに、

散り散らず聞かまほしきに古里の花見て帰る人も

あらなむ

と読みてたてまつりたるほどのことどもなどこそ、返す返す、心も言葉もめでたく覚えはべれ」といふなれば（後略）

『無名草子』

実際には、宇多天皇が出家した後、伊勢は引き続き温子に仕え、後に敦慶親王と恋愛し、子供も生んでいた（注14）が、前掲の二話とも伊勢が宇多天皇に殉じて、寂しい生活をしていたことを強調している。『今昔物語集』の描写では、伊勢の家は庭に苔が生え、簾が所々破れていたが、前栽を趣深く植えて、桜が咲き栄えている古雅な風情を呈している。寂しい環境の中でも情趣のある生活を営んでいた伊勢の気高いイメージが作り出されている。『無名草子』の描く伊勢の籠居先は廃れていて、心細い様子であるが、居所の閑寂さと作歌の優美さとの対照から、伊勢の優雅さが浮き彫りにされている。

『無名草子』は、皇后定子、大斎院選子、小野の皇太后献子を

評価する時にも、彼女達が侘び住まいをしていた時代の逸話を選んでいられる。寂しい生活をしながらも氣品を保っていたことは、貴婦人の伝承に好まれた優雅なイメージである。定子と選子の住居に対する、「庭草は青く茂りわたりてはべりければ」、「人の音もせず、しめじめとありけるに、御前の前栽心に任せて生ひ茂るを、露は月の光に照らされてきらめきわたり、虫の声々かしがましきまで聞こえ」などの描写は伊勢の場合と同じ趣である。伊勢は定子などとは異なり、高貴な身分の人ではないのに、定子などと同様に高貴な女性の理想像として描かれることは、それほど伊勢が後世の尊敬を集めていたことを物語っている。そもそも「伊勢の御息所」という尊称自体は、伊勢が宇多天皇の後妃として目されてきたことの証明である。

一九番歌詞書にある「見つ」の逸話は、『平中物語』にも取り入れられている。『平中物語』第二段は伊勢の歌を使って仕立てられた章段である。女は思わせぶりなそぶりですら平中を翻弄し、返事を賜らなくてもせめて「見つ」ばかりは言ってくださいという平中の哀願に対して、「見つ」とだけ言い返した（注15）。しかし『今昔物語集』になると、その話のヒロインは本院の侍従に移され、それ以後、「見つ」の話は本院の侍従の手柄話として定着した。平中のよき相手であった本院の侍従が『古本説話集』、『宇治拾遺物語』の中では、「色好み」の典型として目されるようになるが、伊勢はあくまで「伊勢の御息所」と尊称され、気高い貴婦人として描かれている。理想的な女性と目されると同時に、多彩な男性関係が語られなくなり、宇多天皇に殉じる潔さが付与されるようになる。

時代が下っても、女の幸せが身持ち次第という理念は変わらな

い。『たまきはる』の中で、作者が伝える建春門院滋子の話、「女はただ心からともかくもなるべき物なり。親の思ひをきて、人のもてなすにもよらじ。我心をつつしみて、身を思ひ腐さねば、おのづから身に過ぐるさいわひもある物ぞ」は、『伊勢集』冒頭が伝える伊勢の態度と共通している。建御前は、そういう態度が主人を女房から国母まで飛躍させた原因であると考えていたことが窺える。『庭の訓』の中でも、阿仏尼は宮仕えをしていた娘に国母となる希望を掛けて、軽々しい振る舞いを戒めている。このような「幸ひ人」は「色好み女房」と正反対な価値観のもとにあった。

六 「色好み女房」の活躍

「色好み女房」は高貴な身分と相容れず、軽蔑を免れがたい存在である。それにもかかわらず、そういう生き方を選んだ人は少なくない。さまざまな逸話を以って活躍していた才媛女房たちは多少なりとも「色好み女房」の性質を帯びている。

『無名草子』は宮廷女性に向けた教養書の性格をも帯びている（注16）。その中で、「色を好む」という表現は三回使われている。

①（前略）いでや、いみじけれども、女ばかり口惜しきものなし。

昔より色を好み、道を習ふ輩多かれども、女の、いまだ集など選ぶことなきこそ、いと口惜しけれ」といへば、「必ず、集を選ぶことのいみじかるべきにもあらず。紫式部が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたるより、さきに申しつる物語ども、多くは女のしわざにはべらずや。されば、なほ捨てがたきものにて、我ながらはべり」と言へば、「さら

ば、などか、世の末にとどまるばかりの一ふし、書きとどむるほどの身にてはべらざりけむ。人の姫君、北の方などにて隠ろへばみたらむはさることにて、宮仕人としてひたおもてに出でたち、なべて人に知らるばかりの身をもちて、『このころはそれこそ』、など人にも言はれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみなむは、いみじく口惜しかるべきわざなりかし（後略）

②

女御、后は、心にくく、いみじきためしに書き伝へられさせたまふばかりのは、いとありがたし。まして末々はことわりなりかし。色を好み、歌を詠む者、昔より多からめど、小野小町こそ、みめ、容貌も、もてなし、心遣ひよりはじめ、何事も、いみじかりけむとおぼゆれ…。

③

必ず歌を詠み、物語を選び、色を好むのみやは、いみじくめでたかるべき。何事にも、歌の道に足りぬるばかりは、いみじくめでたかるべきことやははべる…。

①は女房がものを書いて、名を残すことが望ましいという理念を述べる箇所である。②は小野小町を論じる時の前置きである。

③は音楽の才能の重要性を論じる時の前置きである。ここの「色を好む」は「情趣を愛する」（新潮社・『日本古典集成』・桑原博史校注・一九七六年）、「情趣、風流を好み」（小学館・『新編日本古典文学全集』・久保木哲夫校注・一九九九年）と解釈されている。

「道を習ふ」、「歌を詠む」、「物語を選ぶ」と並べられていることから、「色を好む」は歌、物語など文学的な愛好以外のものをも指していると考えられる。情趣、風流の面に重点を置いたとしても、前述の「色好み」と重なる部分があると考えられる。

『無名草子』の作者は「色を好む」ことを文学的、音楽的才能とともに才媛達の美点として挙げているが、波線部に示されているように、「色を好む」性格を有する才媛たちは、「人の姫君」、「北の方」、「女御」、「后」などと一線を画されている。「なべての人に知らるばかりの身」の宮仕人こそ「色を好む」ことが望ましいという前提が読み取れる。

『無名草子』において、「色を好む」は女房論だけに使われた言葉である。女性の活躍を積極的に肯定する『無名草子』の作者は「末々」の宮仕人たちの「色を好む」性格を好意的に評価し、彼女たちの生き甲斐の一つとして提示している。

女流日記の作者の中にも、「色好み女房」の生き方を実践した人物は何人もいる。清少納言は一条朝の有名な廷臣を網羅的に『枕草子』に取り入れ、作品の中に男性官人たちと上手に付き合い、華やかに活躍していた自分の「色好み女房」の一面を活写した。『枕草子』と同様に、『建礼門院右京大夫集』の前半において、建礼門院右京大夫は、徳子中宮の後宮を舞台に、平家の君達をはじめとする多くの貴公子と交遊していた。弁内侍も『弁内侍日記』において男性貴族とのさまざまな交流や戯れを楽しんでいた。彼女達は宮仕え時代を賛美し、宮廷生活の全般を懐かしく美しく描き、作品の中で「色好み」という言葉を使ってこそいないが、「色好み女房」の生き甲斐を語っていた。

もともと宮廷の中心的存在である国母、后レベルの高貴な女性と、宮廷の周辺的存在に過ぎない宮仕え女房の間には、身分上の大きな隔てがある。まして中流貴族出身の女房や女官たちは、ほとんどは宮廷の中心部に入る見込みがない。彼女達にとって、宮廷の社交界で自分の才色を活かして活躍することができれば、そ

れなりの生き甲斐を得ることができると考えられる。後藤祥子氏は、束の間の貴顕との恋を夢見、その夢を支える後楯として同階層の男たちを考えることは中流女性の誇りであるという中流女性の結婚の価値観を指摘した（注17）。同様に、宮仕人たちは平淡な人生より「色好み女房」の方に生き甲斐を感じ、一時的であつても、その生き甲斐を実現させてくれる宮仕えの場を生涯の思い出として追憶し続けた。こういう生き方を如実に伝えてくれたのが前述の『枕草子』、『建礼門院右京大夫集』、『弁内侍日記』の三作である。

七 二条の「色好み女房」時代

「色好み女房」の性格に照らしてみれば、『とはずがたり』巻二における二条の華やかな宮廷生活は正に「色好み女房」としての活躍である。しかし「色好み女房」の時代は二条にとつても、生き甲斐の実現であつたかといえ、そうではない。二条は普通の「色好み女房」とは根本的な違いがあるのである。

普通の「色好み女房」は、中流貴族の出自が一般的であるのに対して、二条は名門の久我家（清華家）に生まれていた。父の官位は大納言止まりであるが、祖父が太政大臣にも登った人物である。そして二条は自分の出自の高さを強く自恃していた。二条は作品内で、久我家の「梁園八代の古風」を何回も強調し、自分が祖父の太政大臣の猶子として出仕したことを主張するなど、出自に対する並々ならぬプライドを表している。

出自のプライドと相まって、二条が単なる女房ではなく、后妃のランクを目指して出発し、国母の地位を夢見ていたことも普通

の「色好み女房」と異なっている。二条は作品において自分を紫の上や女三の宮などの『源氏物語』の女主人公に準えて描き、正妻への憧れを表している（注18）とともに、院の正妻東二条院と東宮の母東の御方に対して格別な意識を持っていた（注19）。出家した後の述懐の中でも昔自分が「一門の光」（巻四・四四五頁）になる志を抱いていたことを吐露しているのである。

そのような高い希望は必ずしも満足されなかったのが二条の宮廷生活の実態であった。それが原因で、二条が書きとどめた宮廷時代は、苦悩が基調である。院との関係の危機や宮廷における地位の危機による、二条の悲観と不満は前篇のいたるところで表現されている。女薬事件に象徴されているように、祖父が、二条の地位が彼の娘の今参りにも如かないと揚言し、強引に二条の席次を下ろした時、二条は宮廷生活の断絶を賭けて自分の抗議を表していた。彼女によって第一義にもとめられるものはあくまでも宮廷における地位だったのである。

この意味では、二条の人生の本筋は高貴な姫君や「幸ひ人」の立場に近い。「色好み女房」の華やかさは人々の尊重や畏敬を伴わないうわべの繁栄であるから、自分の出自を自持し、国母となる地位を期待していた二条にとって、生き甲斐の実現であるはずがない。それなのに、巻二においては、二条が社交界の花形として扱われたことを誇らしく語り、「色好み女房」の生活を楽しんでいた。「色好み女房」と国母となる理想は相容れない二つの生き方であるにも関わらず、二条は対極の二つの生き方を兼ねていた。これは「色好み女房」二条の特徴であると同時に、彼女の悲劇でもある。

「色好み女房」時代とその前後の時代を並べてみれば、前篇に記された二条の宮廷生活は三つの段階を辿ったことが分かる。巻

一において、院が主に二条と逢瀬の場面に登場し、二条は基本的には院の寵愛を待ち受ける姿勢であった。そして雪の曙との関係において、密通の恐怖に戦ったことは二条が自分を院に忠実であるべき立場に置いたことを示し、院の後宮に準じる心持ちであったことをしめしている。巻二の「色好み女房」時代とその破綻を経た後、巻三になって、院が自分の都合によって二条を男性に与え、二条は院の態度を辛く思いながらもこれに従い、さらに院の黙認に乗じて、有明の月の情熱に溺れてしまった。

それぞれの段階の掉尾を飾る記事は、巻一では院と斎宮の情事の手引き役をさせられたこと、巻二では近衛の大殿に与えられたこと、巻三では御所から追放されたことで、いずれも二条の宮廷における地位の転落を象徴している事件である。こうした転落の過程の中で見れば、「色好み女房」の時代は二条が理想から遠ざかって行く時代である。巻一での望みの地位が得られない代償のよう、巻二において、華やかな「色好み女房」の生活を展開した。「色好み女房」の振る舞いは巻一の段階での希望が挫折した上での生き方の切り替えとも捉えられる。

生き方を切り替えたとはいえ、二条は人生の理想を「后がね」から「色好み女房」に転換したわけではなく、巻一の時期に感じた不満を「色好み女房」の華やかさによって補おうとしただけである。しかし「色好み女房」の振る舞いは二条を理想から更に遠ざける行為でしかない。後深草院宮廷の花形女房というイメージが定着したのに伴って、近衛の大殿や亀山院が公然と後深草院に二条との関係を要求するようなことも起こり、二条が権力交渉の道具のように扱われることになった（注20）。

巻三において、有明の月が死んだ後、院の態度がいつそう冷た

くなる時、二条は「わが咎ならぬ過りも度重なれば、御ことわりにおぼえて」(巻三・三九二頁)と自分を納得させていた。「わが咎ならぬ過り」は院の主導のもとで進行した近衛の大殿、龜山院との情事や、巻三以降の有明の月との交渉を指していると考えられる。それ以前の「色好み女房」の時代と雪の曙との密通まで意識は及んでいない。二条は宮廷生活の失敗の原因を院の裏切りに求めている一方、「色好み女房」の生活の本質に対する意識や反省は作品に見られない。「色好み女房」の時代はあくまでも誇らしい思い出として書き記されている。

後篇の記事においても、昔の宮廷生活に対する否定や反省の表現が見られない。その代わりに、「思ひ捨てにし憂き世ぞかしと思へども、馴れ来し宮の内も恋しく、折々の御情けも忘れられたまつらねば、ことの便りには、まづ言問ふ袖の涙のみぞ、色深くはべる。」(巻四・四四五頁)、「『草の原より出づる月影』と思ひ出づれば、今宵は十五夜なりけり。雲の上の御遊びも思ひやらるるに」(巻四・四四九頁)、「思へただ馴れし雲居の夜半の月ほかにすむにも忘れやはする」(巻四・四七二頁)などのような宮廷時代の昔を懐かしむ記述が所々に現れる。二条は宮廷時代の苦悩や不安などを書き記したにも関わらず、宮廷を生きた場とした自分の過去を否定したわけではなかった。

修行の旅において、二条は自分の運命の拙さを嘆き続けて、宮廷を基盤に栄えてゆくべきであった人生の挫折を悼んでいた。自分の没落を運命として認識した上で、宮廷生活を懐かしみ、「色好み女房」の時代を、とりわけ楽しい思い出として描いたのである。後深草院と結ばれた後、二条は自分の宮廷における地位に期待と不安を持ち、もがきながらも敗北の一途を辿っていった。こう

いった悲劇は運命に恵まれなかった一面もあるが、巻二に描かれた「色好み女房」の時期の描写が示すように、高い理想と矛盾する「色好み女房」の氣質を合わせて持つことも大きな原因である。その要因への認識に至らない代わりに、すべての不幸を運命に帰結させることは彼女の限界でもあったと考えられる。

八 終わりに

本稿は、鎌倉期までのさまざまな文学作品に描かれた「色好み」の女性に対する分析を通して、「色好み女房」という宮廷女房の生き方の類型を見出し、『とはずがたり』巻二に描かれた二条の宮廷生活をこの「色好み女房」の系列において捉えなおした。二条の巻二における活躍の本質は「色好み女房」としての活躍である。「色好み女房」は多彩な生活を営む反面、高貴な女性と相容れず、人々に軽蔑される一面がある。巻二における二条の「色好み女房」時代も、『とはずがたり』のもっとも明るくて華やかな時期であると同時に、二条が理想の地位から遠ざかる時期である。対極的な二つの生き方を合わせて持つ矛盾は二条の悲劇であるが、二条は「色好み女房」の生活の矛盾を語らず、「色好み女房」の時期を誇らしい思い出としてのみ書き記したのである。

※『とはずがたり』の本文、頁数および年次推定は久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集・とはずがたり』(新編日本古典文学全集・小学館・一九九九年)による。また、『うつほ物語』、『伊勢物語』、『蜻蛉日記』、『源氏物語』、『栄花物語』、『今昔物語集』、『宇治拾遺

物語』『十訓抄』『無名草子』も小学館刊新編日本古典文学全集本を用いた。『古今著聞集』は新潮日本古典集成本を用いた。『伊勢集』『古本説話集』は岩波書店新日本古典文学大系本を用いた。『たまきはる』は原幹雄・錦織周一・吉川隆美・稲村栄一共著『たまきはる全注釈』（笠間書院・一九八三年）を用いた。『扶桑略記』は新訂増補国史大系『扶桑略記』（吉川弘文館・一九六五年）を用いた。

注

- (1) 松本寧至『とはすがたりの研究』（桜楓社・一九七一年）、渡辺静子『中世日記文学論序説』（新典社・一九八九年）など。
- (2) 岩佐美代子『宮廷女流文学読解考 中世編』（笠間書院・二〇〇九年）、標宮子『とはすがたりの表現と心——問ふにつらさ』から「問はず語り」へ（聖学院大学出版社・二〇〇八年）。
- (3) 次田香澄『とはすがたり構想論』（『文学』三五巻一号・一九六七年一月）。
- (4) 三角洋一『とはすがたり』前篇の構成と意図（『ミメージス』四・五号・一九七四年九月）。
- (5) 岩佐美代子『とはすがたり 読解考』『宮廷女流文学読解考 中世編』（笠間書院・二〇〇九年）。
- (6) 今関敏子『色好み』の系譜 女たちのゆくえ（世界思想社・一九九六年）。
- (7) 伊勢物語講読会『伊勢物語』における「色好み」の女性像（『盛岡大学日本文学会研究会報告』六号・一九九八年三月）。
- (8) 山本登朗『伊勢物語の悪女』『伊勢物語論 文体・主題・享受』（笠間書院・二〇〇一年）。
- (9) 木下美佳『翻弄される昔男——『伊勢物語』の「色好み」につ

れなし』と冠される女を視点として」（『語文』八八号・二〇〇七年六月）。

- (10) 藤井貞和『物語における男と女——色好み小考』（『国文学解釈と鑑賞』四二巻一号・一九七七年一月）。

(11) 注（6）論著による。

- (12) 『扶桑略記』寛平八年九月廿二日条「陽成太上天皇之母儀皇太后藤原高子。與東光寺善祐法師。竊交通云々。仍廢后位。至于善祐法師。配流伊豆講師」。

- (13) 『栄花物語』（つばみ花）「承香殿女御に、故式部卿宮の源宰相頼定の君忍びつつ通ひきこえたまふほどに、右大臣聞きたまひて、まことそらごとあらはし聞えんと思しけるほどに、御目にまことなりけりと見たまうてければ、いみじうむつからせたまひて、さばかりうつくしき御髪を、手づから尼になしたてまつりたまふに、憂きこと数知らず見えたり」。

- (14) 関根慶子『伊勢集全釈』『解説』（関根慶子、山下道代共著『伊勢集全釈』・風間書房・一九九六年）。

- (15) 本稿が引用した『伊勢集』の本文では、男が「などか見つとだにのたまはぬ」と言っただけで、女の返事がしるされていないが、異本には、男の請求に対して、女が「見つ」と一語だけを返した記述がある。（関根慶子、山下道代共著『伊勢集全釈』九九頁【参考】・風間書房・一九九六年）。

- (16) 田淵句美子『無名草子』の視座（『中世文学』五七号・二〇一二年六月）。

- (17) 後藤祥子『平安歌人の結婚観——私歌集を切口に——』（『論集平安文学』第三巻・勉誠社・一九九五年十月）。

- (18) 西沢正史氏は紫の上の物語と女三の宮の物語の『とはすがたり』

(19)

の構想における役割を明らかにし、二条が源氏の正妻格であった紫の上と女三の宮に対して深い思い入れを持ち、正妻コンプレックスを秘めていたことを指摘している。(『とはずがたり』における『源氏物語』『とはずがたり・中世女流日記文学の世界』女流日記文学講座・第五巻・勉誠社・一九九〇年)。

女院、国母になった女性に対する記述から雅忠・二条親子の国母の地位に対する願望が窺える点について、今関敏子『中世女流日記文学論考』(和泉書院・一九八七年)、三角洋一『とはずがたり・解説』(『とはずがたり・たまきはる』新日本古典文学大系・一九九四年)などの論考がある。

(20)

竹石とか枝氏は『とはずがたり』における愛欲と出家』(『とはずがたり・中世女流日記文学の世界』女流日記文学講座・第五巻・勉誠社・一九九〇年)において、後深草院が摂関家の有力者を持明院統の見方に籠絡するため近衛大殿に、両院の緊張を和らげるため龜山院に、それぞれ二条を奉仕させたと指摘している。阿部泰郎氏は後深草院が性助法親王の担い持つ御室の仏法の權威を持明院統に移譲させるために、二条をもって「有明の月」を脅迫していたと指摘している(『とはずがたり』の王権と仏法―有明の月と崇徳院〕赤坂憲雄編著『王権の基層へ』・新曜社・一九九二年)。

(キユー・シュンセン／北京外国語大学博士課程)